

令和3年度第1回 大阪府河川及び港湾の底質浄化審議会
寝屋川流域底質改善対策検討部会 議事要旨

日時：令和4年1月7日(金) 15:00から17:00まで

場所：大阪府西大阪治水事務所 対面・Web会議形式併用

出席者：西田委員（部会長・Web参加）・遠藤委員・大谷委員・惣田委員 計4名

まとめ

平野川における薬剤等を活用した底質改善対策の試行実施について

- ・平野川における薬剤等を活用した試行実施の中間報告を行った。
- ・試行実施結果の取りまとめ方針について審議した結果、散布量・散布間隔を踏まえたデータ整理を行ったうえで、資料27ページ「まとめイメージ」をベースに解析を行うこととなった。

[以下、○委員 ●事務局]

概要

- （資料に基づき、事務局より説明）

主な意見

【試行実施結果（中間報告）について】

- メーカーが公表する薬剤の効果期間が3カ月なので万才橋の3か月以降は評価期間の対象外としてはどうか。
- 「対照区より実験区の改善傾向が大きい変化」は『改善』、「対照区より実験区の悪化傾向が小さい変化」は『緩和』とする等、言葉の定義を的確にすべきである。
- 資料27ページの「まとめイメージ」一覧表はわかりやすいが、「エリアごと」の比較よりも、「散布回数」や「散布量」の違いごとに比較・評価した方がよい。
- 資料の「まとめイメージ」一覧表において、「対照区より実験区の改善傾向が大きい」場合と「対照区より実験区の悪化傾向が小さい」場合は区別して評価すべき。
- 実験区と対照区で初期値が異なる場合、それを踏まえて評価できるかが課題である。
- 堆積・洗堀の状況により、採泥時期によって異なる堆積層の底質を評価している場合があることに留意してデータを見る必要がある。
- 薬剤の効果について、「散布量」や「散布間隔」の違いや、各底質項目への効果の違い等を見やすいように表にまとめる必要がある。
- 薬剤による改善メカニズム的には、1か月で改善しやすいのはORP、次いで硫化物というような底質項目ごとの時系列的な変化の視点でも整理できるかもしれない。
- 現状では情報量が多すぎるので、ORP、全硫化物、TOC、強熱減量について、主成分分析等の多変量解析等により指標を検討してみてもどうか。

【AIを活用したスカムの解析について】

- スカムは最終的には大阪湾まで流下するのか。
- 2～3日で沈降するため、おそらくは第二寝屋川程度までしか流下しないが、再浮上の有無については不明である。
- 下水放流等の連続データやスカム発生状況データを踏まえ、AIを活用したスカムの発生予測を検討してはどうか。分野は異なるが、沿岸域では、気象条件（風向・気温等）より青潮の発生予測を行っている例もある。
- スカムの厚み・質の評価は今後の課題である。なお、スカム検知の際に、実際に苦情等があったか。スカムの水面被覆率と実際の苦情等の関係が取れば将来的に良いと思う。
- 被覆率と苦情の相関性はまだ不明確である。例えば、季節的に見ると夏場は沿川住民が窓を開けており、スカムを視認しやすい、臭気を感じやすい等により苦情が出やすくなる等、他の要因も寄与している。

一般傍聴からの発言受付

発言なし